

～我が家の洋食器～

春田春山と多治見の上絵付

平成20年1月21日(月)～7月4日(金)



上絵吹付富士山文額皿
銘・名陶 昭和18～24年(1943～49)



1. 春田春山について



下絵吹付バラ文ティーセット
銘・倉陶 昭和15年(1940)頃



上絵吹付鯉文和皿
銘・春山 昭和20年(1945)代

明治38年(1905)に土岐郡(現・土岐市)妻木町で生まれた春田春山(本名・小八郎)は、多治見町平野(現・多治見市平野町)で下絵職人をしていた頃に西浦焼の吹き絵に出会い、下絵吹付の研究を始める。昭和15年(1940)、名古屋猪子石の倉知製陶(倉陶)に就職し下絵吹付の製作及び指導を行う。昭和18年(1943)には名古屋製陶会社(名陶)に移り、上絵吹付の研究を始め、上絵の富士山絵の製品を製作する。

吹き絵とは、絵具を霧状に吹き付けて彩色する陶磁器の技法であるが、当時の吹き絵は、一色を全面に吹き付けただけのものや簡単な型を貼り付け吹き付けたものなど、単純な手法のものも多く、技法としては軽視されていた。そんな中、昭和23年(1948)の第1回多治見意匠展で、名陶で製作した春山の富士山絵組皿が最高賞を受賞し、多治見の上絵付業界に一躍春山の名が知られるようになる。「春山の吹き」が出現したことは、上絵付業界にとって衝撃的で、当時、吹きで富士山や鯉など日本画のように絵を描く方法が誰にも分からなかったという。意匠展での受賞の翌年、白山町で開業するが、ちょうどそれは国内に洋食器が普及し始める

時期とも重なり、吹き絵を施した国内向けの洋食器生産を拡大していく。

昭和25年(1950)、春山は日根野作三と出会う。日根野作三は、昭和22年(1947)から30年代後半まで美濃でデザイン指導を行い、小谷陶磁器研究所(後の土岐市陶磁器試験場)や美濃焼上絵付研究所(後の多治見市陶磁器意匠研究所)の設立などに関わるなど、戦後の美濃陶磁器業界の根幹作りに大きく関わった人物である。その日根野が春山の鯉の吹き絵を目にし、「西浦焼の流れを汲み、現代のスプレーで完全且つ能率的に

この(吹き絵)技法を完成した第一人者である」(日根野1969)と評し、デザイン提供を申し出る。以後、毎月1回程、吹き専用のデザイン画を持って春山を訪れるようになり、デザイン提供だけでなく、若い職人達へ陶磁史やデザインの講義も行った。日根野との出会いから春山の吹きデザインは大きく変わり、多様なデザインに対応するため、息子・正紀が何枚もの銅板型を重ねた吹き型を考案し、昭和30年代の国内向け洋食器需要の増加と相俟って、春山と日根野が組んだ多彩な吹き絵が生み出されることになる。

春田春山(小八郎)は昭和39年(1964)に死去するが、息子・正紀が会社を引き継ぎ、吹き絵業を続けた。しかし、昭和40年代後半になると、春山を模した安価な吹き絵が出回るようになったことから、酸化焼成で他の技法を用いた製品製作に移行する。昭和50年頃に吹き絵を一時再開するものの、スクリーン転写の普及により手描きの需要減少もあり、まもなく吹き絵業を停止する。

2. 春山の吹き型

富士山や龍など初期の作品は手持ちの型を用い、手で角度を変えながら吹いた。背景の雲や水の流れはスプレーガンと型を同時に動かしながら吹き付けて描くが、これには高度な技術が必要で、春山以外の職人はできなかったという。

昭和25年頃からは日根野作三のデザインに対応するため、息子・正紀が絵柄の意図するシャープさとぼかしを表現出来る独自の吹き型を考案し、数人の職人が吹きを行った。初期は5人位、最盛期には20人程の職人がおり、1人が1日に碗皿で5ダース程製作した。春山の型は、合わせ型を1枚1枚剥がしながら、絵具を吹き付けていく方式で、葉の葉脈のような細かい部分は手持ちの型で描く。絵具を吹き付ける際は、型を器面にきっちりと付けずに、少し浮かせることによってぼかしが可能となる。上絵吹付の場合は油性絵具で速乾性があるが、下絵付は水性絵具のため速乾性がなく、吹き付けている間に型が濡れて絵具が垂れてしまうため、型を熱しておく必要があり、ヒーターを取り付けた型で作業を行った。



日根野作三デザイン帳
昭和27年 岐阜県陶磁資料館所蔵



右中：日根野作三デザインの春山吹き絵
左下：春山吹き型（昭和25～50年頃）
右下：上の型で絵付されたカトレヤ文皿



吹き絵（吹付・吹き）

スプレーガンなどを用いて絵具を霧状に素地に吹き付けて彩色する方法で、全面に均一に吹き付ける総吹き、ボカシ吹き、糸状に吹き付ける糸吹きや、型を用いる型吹きがある。型吹きは鉛板や銅板、紙などを切り抜いた型で器面を覆いその上から絵具を吹き付ける方法で、型で覆った以外の部分が彩色され、模様が浮き出てくる。吹き絵には上絵付と下絵付両方の技法があるが、下絵付の技法としては明治時代に造られた西浦焼が有名である。下絵付の場合は水溶きした絵具を用い、上絵付は油溶きの要領で、上絵具に白ワニス、テレピン油などを混合する。吹付は、コンプレッサーにつないだスプレーガンを用い、絵具を霧状に吹き付ける。



スプレーガンで絵具を吹き付ける（ボカシ吹き）
『上絵付け技術基礎』（多治見市陶磁器意匠研究所）

3. 我が家の応接間と洋食器

昭和30年代、日本国内は戦後復興期を経て、高度経済成長期に入る。生活にゆとりが生まれ、応接セットを置いた応接間や、ダイニングテーブルを供えたキッチンなど、一般家庭に洋間が設けられるようになる。応接間はお客を椅子でもてなす部屋であり、そこでのお客様のおもてなし用の食器として、ティーセットなどの洋食器が一般家庭へ普及し始める。



国内への洋食器の普及に一役買ったのが、昭和31年(1956)頃から流行し始めた月賦販売方式「頒布会」である。「頒布会」は、8～12種類の食器で構成された洋風セットで、洋食器のカップや皿と和食器の飯茶碗や湯呑などが組み合わせられ、毎月、同じ絵柄で異なる種類の食器が届けられる仕組みだった。支払いも月賦方式のため、家庭の負担も軽く済み、新婚家庭用の食器として人気を集めた。春山も頒布会向けの食器を生産している。

欧米向けの洋食器の場合、寸法や形式が厳格に決められているが、国内向け洋食器はその形式にとらわれず、コーヒー碗皿の受け皿には中心に凹みを設けずパン皿としても使えるようにするなどの工夫をして販売された。

4. 多治見の上絵付

明治時代、上絵銅版や石版転写などの上絵付量産技法が多治見で開発されるが、とくに、明治22年(1889)に加藤小三郎が上絵銅版を開発し、多治見町(現在の市役所周辺)に「金欄赤絵師」といわれる上絵付業者が増加する。しかし、第二次大戦により多治見の上絵付業は一時停滞、昭和22年(1947)に民間貿易の再開で再び上絵付の需要も増加するものの、業者の減少から需要に追いつけず、白素地を名古屋に送って上絵付が行われるという状況だった。そのため、多治見では転写印刷業者の誘致運動や絵付技術者養成の動きが起る。技術者の養成のため、多治見上絵加工組合の安藤秀二らは昭和25年(1950)に「上絵意匠会」を発足させる。翌年「美濃焼上絵付研究所」となり、昭和34年(1959)には市へ移管され多治見市陶磁器意匠研究所と改称された。戦後の多治見の上絵付は石版転写やゴム判などの量産技法の他、油溶きや漆蒔、吹き絵、腐蝕などの手工的技法も流行するが、昭和37年(1962)に多治見市陶磁器意匠研究所によるスクリーン転写の実用化後、手作業による上絵付の需要が減少していく。



上絵銅版皿
明治～大正時代(20世紀初)

西浦焼

西浦家は初代圓治から5代まで圓治を襲名し、江戸時代後期から代々多治見村の庄屋を勤めると同時に、文政11年(1824)より陶器仲買人を始める。幕末、2代圓治が美濃焼物取締所初代取締役を勤め、明治時代に入り3代から5代圓治が美濃焼の貿易・販売会社や製造会社を設立し、陶磁器製造、欧米諸国への輸出を行い、美濃焼の品質向上及び販路拡大を推進する。この3代から5代までが明治時代に製造した陶磁器を「西浦焼」という。

西浦焼は当初、市之倉で加藤五輔と組んで染付磁器が製造され、明治時代中頃には多治見、名古屋の工場の上絵付、明治時代後半に多治見の尾張坂で吹き絵磁器が製造された。後半期に製造した吹き絵製品が西浦焼の代表作である。



西浦焼下絵吹付杜若文碗皿
明治時代(20世紀初)

上絵付と下絵付

顔料を用いて、釉下に装飾を施すものを下絵付、釉上に施すものを上絵付という。下絵付は、素焼きや生の素地に絵付を施した後に施釉し 1200～1300℃の高温で本焼成するため、高温に耐えて発色する顔料を用いる必要があり、色数が限られる。一方、上絵付は本焼成後に絵付して再び 700～800℃程の低温で焼き付けるため、下絵付よりも色数は格段に増える。また、素焼き素地のザラツとした面に絵付けをする下絵付と、本焼成した釉上のツルツルした面に絵付する上絵付とは、手法や絵具の溶剤も異なってくる。たとえば、下絵付の吹き絵の場合は、絵具に水と飴を混ぜて溶くが、上絵付の場合は、絵具と白ワニス、テレピン油などの油分を混ぜるといった違いがある。

春田春山年表

年号	西暦	年齢	春田春山に関わる事項
明治38	1905	0	土岐郡(現 土岐市)妻木町に生まれる。本名・小八郎。家は窯焼業を営む。
明治45/ 大正1	1912	7	妻木尋常小学校入学
大正7	1918	13	妻木尋常小学校卒業後、妻木町、下石町で絵付職人として働きながら、通信講座で和歌・書道・文学を学ぶ。
大正13	1924	19	兵役を務める
昭和4頃	1929	24	器の勉強のため、板前修業に上京(2年間程)
昭和6	1931	26	多治見町平野(現 多治見市平野町)に移り、絵付職人を勤める。長男・正紀誕生。
昭和9頃	1934	29	瀬戸赤津に移り、やきものの勉強をする。
昭和13	1938	33	再び、多治見町平野に戻る。下絵吹付の研究を行う。周辺の窯で下絵吹付職人として働きながら、当時幸兵衛窯にいた鈴木道雄(人間国宝・鈴木蔵の父)に釉薬の指導を受ける。
昭和15	1940	35	名古屋市猪子石の倉知製陶に就職、下絵吹付の製作・指導を行う。
昭和18	1943	38	名古屋製陶会社(名陶)に入社し、上絵吹付の研究を行う(上絵富士山絵などを製作)。
昭和20	1945	40	終戦
昭和23	1948	43	名陶で製作した「上絵吹付富士山絵組皿」で第1回多治見意匠展最高賞を受賞する。
昭和24	1949	44	2月、名陶を退社。平野町から白山町に移り、上絵吹付業を開業。
昭和25	1950	45	鈴木道雄の紹介で日根野作三に出会い、日根野作三デザインの吹き絵製作始まる。
昭和26	1951	46	国内外の展覧会に出品し、多数の賞を受賞。
昭和28	1953	48	「西浦焼の復興(意匠吹付の研究)」で岐阜県教育委員会より文化助成を受ける。
昭和30	1955	50	本焼用の窯を導入し、下絵(染付)吹付の研究を始める。
昭和39	1964	59	10月30日、死去。

※岐阜県陶磁資料館「春田春山略歴」をもとに作成。敬称略

参考文献

- ・日根野作三『20cy 後半の日本陶磁器クラフトデザインの記録』光村推古書院 1969
- ・多治見市『多治見市史 通史編下』1987
- ・岐阜県陶磁資料館『春田春山展』展示資料 1996
- ・愛知県陶磁資料館・瀬戸市歴史民俗資料館『カップ&ソーサーの世界』2000
- ・岐阜県陶磁資料館『日根野作三足跡展』2007
- ・多治見市陶磁器意匠研究所『上絵付け技術基礎』

多治見市文化財保護センター企画展

「～我が家の洋食器～」

春田春山と多治見の上絵付

展示期間：平成 20 年 1 月 21 日 (月)～7 月 4 日 (金)

開館時間：午前 9 時～午後 5 時 休館日：土・日・祝日 入場無料

発行 多治見市教育委員会・文化財保護センター

〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘 10-6-26

Tel(0572) 25-8633 FAX(0572)24-5033

URL <http://www.city.tajimi.gifu.jp/bunkazai/>